
マテリアルハンターズ

雑月 桜華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マテリアルハンターズ

【Nコード】

N4082F

【作者名】

薙月 桜華

【あらすじ】

素材を集め、それらを売却して生活する人たちをマテリアルハンターと呼ぶ。これは小さな村に住む三人がマテリアルハンターになつて様々な素材を集めていく物語。

第一話 突然の依頼

第一話 突然の依頼

シェイとレンは二人揃って小高い丘を必死に登っていた。丘を降りた先にある村まで競争しているのだ。

二人は息を荒くしながら丘を登りきると、眼前に大きな海が見えた。その手前にシェイたちの村が見える。

シェイは、海の広さに見とれて立ち止まりそうになる。しかし、すぐに現状を思い出して体を動かした。その隙に、レンがシェイの前に出る。

丘を下り始めるとレンとシェイとの差はさらに広がった。レンは振り返ると、後方に居るシェイを見て笑っている。レンは、もう自分は勝ったと思っているらしい。

シェイはレンの笑いに、悔しさが生まれしてきた。「負けるか。」

シェイは小さく自分だけに聞こえるように言う。歯を食いしばって、今以上に腕を振り地面を蹴った。

シェイは少しずつレンに近づいていく。シェイを見るために振り向いたレンは、あまりの速さにそれ以上こちらを見ずに前を向いて走った。

丘を下りると、村までは長く平坦な道が続いている。

シェイはここで勝負をかけなくちゃいけないと思った。彼は目を瞑る。そして、思いつきり腕を振る事で今以上に早く走ろうとした。

レンの足音や声が少しずつ近づき、そして遠ざかっていく事が感じられた。自分はレンを抜いたのだ。そう思ったシェイは、直後柔らかいものに激突した。そのまま仰向けの状態で地面に倒れる。

「い、痛い。なんだよ。」

目を開けると、目の前にはわらの束を載せた馬車があった。シエイはそのわらにぶつかって倒れたらしい。

「大丈夫かい。」

馬車を引いていた中年のおじさんが心配そうにこちらを見る。

シエイはゆっくり起き上がった。

「だ、大丈夫で……。」

シエイはそこで競争の事を思い出して村の出入り口を見た。案の定、レンがそこからシエイを見ている。その顔は勝者の勝ち誇った顔をしている。シエイは悔しい気持ちを体の中に押し込むと、おじさんを見た。

「大丈夫です。ご心配をおかけしました。」

シエイはおじさんに謝るとすぐに村の出入り口へ向かって走った。少しずつレンの姿が大きくなる。

シエイは立ち止まると、両手を両膝において何度か大きく息を吸って吐いた。

「どうやったらあれにぶつかるんだよ。」

レンはため息交じりに言った。その視線の先には、先ほどシエイが激突した馬車がある。

「目瞑って踏ん張ったらぶつかった。」

シエイはレンを見上げる。しかし、その時点でレンは村の方へ体を反転させていた。

「じゃあ、俺は家に帰るから。」

村の中へ入っていくレンを追いかけて、シエイも村の中に入った。

シエイは村の中に入ると、自分の家へと向かった。途中近所の小さな子供たちが彼の周りに集まるも、シエイの一言でみんな何処かへ行ってしまった。シエイから離れていく子供たちは、触らぬ神に祟りなしといった顔をしている。

シエイは自分の家に入ると、靴を脱がずに仰向けに寝転がった。床が木で出来ているために、触れる腕や足から冷たい感触が伝わっ

てくる。

「ああ……。」

シエイは、しばらく居心地の良い床の上に寝転がっていた。しかし、その時間は突然終わりを告げる。

「シエイは居ますか。」

家の外から女の子の声が聞こえてくる。

「ん。はい。」

シエイは左手で目を軽く擦りながら顔だけ家の出入り口を見る。しかし、誰かが居ることは分かるが、逆光でよく見えない。

「誰。」

ゆつくりと床から起き上がると、家の出入り口へ向かって歩いた。家の出入り口に近づくと、そこにはシエイの良く知る女の子が居た。

「サラか、僕に何か用なの。」

シエイは寝起きのためか、あまり口が回っていない。

サラと呼ばれる女の子は左腕を腰に当てた。

「まさか昼間から寝てたの。まあいいわ。ちよつとこつち来て。」

サラはそれだけ言うと、体を反転させて歩き出した。

「おい、ちよつと待てよ。」

シエイはサラのあとを追いかけて家を出た。外に出ると、太陽の光がシエイの体を照らしている。太陽の光も外の空気も本当に暑くて何時か自分の体が沸騰するんじゃないかとシエイは思った。立ち止まって居ても良いことは無いので、サラに付いて行った。

シエイが着いた先は良くお世話になっているお婆さんがいるところだった。そこにレンも居た。

「シエイ。お前も婆さんに呼ばれたらしいな。」

レンはシエイを見ると、お婆さんを見た。

「ちよいと頼みごとがあつてね。二人を呼んだのさ。悪いけど二人で森へ行つて薬草を取ってきて貰いたいんだよ。お礼はするよ。」

お婆さんはシエイとレンを交互に見る。

「薬草か。ものは見たことあるから、早速森に行つて採つてくるよ。なあ、シェイ。」

レンはシェイを見る。シェイは、レンに頷く。

シェイは、薬草自体は村でよく実物を見るので森に行つて採つてくることは難しくは無いだろうと思つた。そして、レンも同じように考えているだろうと思つた。

「そういう理由だったのね。だったら、私も二人と一緒に行くわ。」

お婆さんはにサラを見る。

「やめときなさい。」

お婆さんの声がその場に冷たく響く。そしてお婆さんはシェイとレンのほうに視線を戻した。

「じゃあ気をつけて行つて来るんだよ。」

お婆さんはシェイとレンに笑顔で言つた。

「じゃあ行つてきます。」

二人はそのまま村を出て、森の方向へ歩いていった。

その姿を見たお婆さんは、大きく深呼吸をした。

「お婆ちゃん。なんで私は駄目なの。」

遠ざかるシェイとレンを見ながら、サラはお婆さんに言つた。

サラはどうしても納得出来ないようだ。

「サラ。行きたいのなら次回以降にしたほうが良いよ。」

「次回以降って……。」

サラはお婆さんを見る。しかし、お婆さんはシェイとレンを見ているだけ。サラはその後に続く言葉を飲み込んだ。

「あの二人は何も持たずに森へ行つた。そんな男達と一緒に行かせられないね。」

お婆さんはそう言い放つとサラを見た。

「サラ。私はね。何時までも走り回っているあいつらをマテリアルハンターにしようと思つているのさ。あいつらの有り余る力を有効

活用するためにね。」

お婆さんは再び村の外を見た。シェイとレンの姿はもう米粒ほどの小ささになっていた。どちらかは分からないが、一人が地面を蹴って飛び跳ねている。

「二人が薬草を持って戻ってきたら、次の仕事を与える予定だよ。」
お婆さんはサラを見た。

「その時はサラ。今度はお前も一緒に行くといいさ。好きにすればいい。」

サラは静かに頷く。二人が再び村の外を見ると、既にシェイとレンの姿は見えなくなっていた。

「三人で、マテリアルハンターズだね。」

お婆さんは小さく呟いた。その姿は、何か楽しい事を思いついた少女のように見えた。

〈マテリアルハンター〉

素材を集め、それらを売却して生活する人たちのこと。元は希少価値の高い素材を集めて売却する人たちを指した。

第二話 はじめての素材

第二話 はじめての素材

シェイとレンは村を出ると、そのまま森の中へ入った。森の中は太陽の光を遮っているために涼しく感じられた。

「さっさと見つけて、帰ろうぜ。」

シェイはレンの言葉に黙って頷く。二人は早速辺りを見回して、薬草を探し始めた。

森の入り口から少しずつ奥に向かって薬草を探すも、見つからない。

「婆さんの言ってた薬草。見つからないな。」

レンが背中を伸ばしながら、シェイを見る。

「もつと奥のほうにあるんじゃないかな。」

レンはシェイの言葉にため息をつく。

「簡単だと思っただけだな。」

レンは頭をかきながらシェイを見た。

レンにとつては、すぐに終わってお婆さんからお礼がもらえる楽な仕事だと思っているらしい。シェイは薬草を探すために地面を見ながら思った。

「もつと奥に行ってみるか。」

シェイはレンの言葉に頷くと、今よりももつと奥へと進んでいった。

森の奥に進むにつれて辺りはどんどん暗くなる。しかし、大きな動物は見えぬ鳥の鳴き声だけが聞こえるばかり。

突然、何処からか草木が擦れる音が聞こえた。シェイとレンはすぐに音がした方向を見る。

すると、そこには探していた薬草があった。二人は近づいて薬草に触れる。

「これだな。よし、持ち帰ろうぜ。」

レンの声に、シエイは頷く。二人は薬草を土から引き抜く。

「あ、入れ物が無いや。」

シエイはそこで初めて気が付く。このままでは手で持って帰ることになる。

「仕方ないな。今回はそのまま持って帰ろうぜ。」

レンは近くにある薬草全部を採って両手に持っていた。

「さてと、帰ろうか。」

二人は薬草を両手に持ってその場を離れようとした。その時、再び草木が擦れる音がする。

二人が振り返ると、そこには猪が居た。

「ひゃつ。」

シエイは猪を見ると小さく悲鳴を上げて、ゆっくりと後退る。

猪の体は大きく、何故今まで気が付かなかったのかと思った。

猪と二人の距離は約二メートル。薬草以外に何も持っていない二人に残された選択肢は一つ。

そして、選択肢を選ぶときが来た。

猪が勢い良くこちらに走り出してきたのだ。

「に、逃げるぞ。」

二人は同時に地面を蹴って森の入り口へ向かって走った。

猪は鼻息を荒くしながら二人を追いかける。

レンが背後の猪を一度見る。

「あいつ何で追いかけてくるんだよ。まさか、あそこはあいつの縄張りだったのか。」

「黙って走れ。森の入り口まで競争だ。」

レンの言葉を吹き飛ばすようにシエイは力強く言った。森を抜ければ、猪も諦めてくれるだろうとシエイは思った。

それ以降は、二人とも黙って走った。不規則に生える木々を避けながら走り続けると、森の中がすこしずつ明るくなり始めた。森の入り口が近づいている。

もう少し、もう少しだ。もう少しで森から出られる。シエイは太陽に照らされた森の外を見て思った。

二人は森を抜けると、立ち止まって一度森を見る。

「ここまででは追いかけて……。」

シエイはもう大丈夫だろうと思いつながら再度森の入り口を見た。

その時、森から猪が勢い良く飛び出してきた。

「来ただろうがよ。」

レンも猪に気が付く。すぐに二人は再び走り始めた。

村へ続く平坦な道を二人は必死に走った。村に近づくと、村に居る何人が二人に気が付く。そして、武器を持ってこちらに走ってきた。

「お前らは村へ入れ。」

こちらに向かつてくる男たちはみんな体つきの良い人たちばかり。先頭を走っていた大男が二人とすれ違つてすぐに、二人の背後から猪の悲鳴が聞こえてくる。すぐに振り返ると、大男が棍棒で猪を殴っていた。

僕らはそのまま村に入った。村の中には男達が猪を仕留める姿を見る人が何人が居た。その中にお婆さんとサラも居た。しかし、サラはすぐにどこかへ行つてしまった。

二人はお婆さんの所へ走つて行った。

「猪にここまで追いかけて来たとはいね。今度からは何も持たずに行くのはよしたほうが良いよ。」

猪を仕留める男たちを見ていたお婆さんは、二人を見て言った。

「約束の薬草です。」

二人は手に持っていた薬草をお婆さんに手渡した。強く握っていたためか、薬草は良い姿をしていない。

お婆さんは薬草を受け取る。そして、薬草を見た。

「こんなんじゃ。お礼なんて出来ないね。今度からはこういうものは手に持たずに袋に入れることだよ。ほれ、これを使いな。」

お婆さんは、傍に置いてあった袋二つを二人に渡した。レンは

渡された袋をよく分らないといった顔をしながら見ている。シェイも同じくよく分からずに袋を受け取った。

そして、お婆さんは村の外を見る。既に猪は仕留められ男たちに運ばれていた。

「それでも、おまけで猪が手に入ったんだ。少しは礼をしないとね。マテリアルハンターたちに。」

お婆さんは笑顔で二人を見た。

「えっ、マテリアルハンターって。」

シェイがお婆さんに聞く。シェイはお婆さんの言った事がよく分かっていない。

「マテリアルハンターって職業があるんだよ。今日あんたたちがしたことがそれさ。素材を採って来て報酬をもらう。」

お婆さんは二人を見て言った。そこへ、サラが小さな布袋、長さの異なる錆びた三本の剣、弓と矢筒を持ってきた。

「お婆ちゃん。言われたものを持ってきたよ。」

サラは手に持っていたものをその場に置き。布袋をお婆さん到手渡した。

「ちよつといいかい。」

全員が男の声のするほうを向いた。そこには、肉の塊を持った大男が居た。先頭を走って猪に向かっていった男である。

「おかげで食料が手に入ったよ。ありがとう。これがあんたらの分け前だ。やるよ。」

大男はそう言うつと、肉の塊を二人の手の上に載せた。肉の塊が意外と重かったのか二人の顔が歪む。

「だけど、今度からは自分達で仕留めろよ。じゃあな。」

大男はそれだけ言うつと何処かへ行ってしまった。

「この肉どうしようか。」

シェイとレンは突然のお肉の登場にこれ以上何も持てなくなつた。

「仕方が無いね。肉を持って私の家に戻るよ。サラ、持ってこさせ

てすまないね。私も持つよ。」

お婆さんは立ち上がり、サラが持ってきたものの一部を持って歩き出した。三人もその後が続く。

全員がお婆さんの家に着く。

「肉はその辺に置いときな。あとで切り分けてやるよ。」

お婆さんの言葉で、シェイとレンは肉の塊を調理場の空いている場所に置いた。

二人はすぐにお婆さんたちの所に戻る。

「さてと、続きを始めようかね。」

お婆さんは手に持った布袋からお金を取り出して、二人に分けた。

「これがお礼だよ。」

お婆さんはその後、サラが持ってきたものの中から二本の錆びた剣を取り出して二人に見せた。

「使ってなかった剣があったからね。あんたらにやるよ。」

シェイとレンは長さの違う二つの剣を見せられる。しばしの沈黙の後、レンが先に声を出した。

「じゃあ僕はこつち。」

レンは短い剣を選らんだ。よって、長い剣はシェイになる。シェイにとってはどちらでも良かった。長い剣に決まった事で、この剣のほうが高合が良い事を考え始めた。

「決まったね。分かっているとおもうけど。これらは錆びていて使い物にはならない。さっきあげたお金があるだろう。そのお金で治して来るんだよ。」

お婆さんの言葉に、二人は驚く。これではお金をもらったのは確かだが、自由には使えない。

「自分のために使えるお金が欲しいなら。次の頼み事も聞くことだね。それと、今度からはサラも行くらしいよ。」

二人はお婆さんの言葉にサラを見る。

「えっ。」

予想外の事実に二人ともそれ以上何も言えなかった。

「残った武器がサラのだよ。こっちの武器ももしまらく使っていないから治してきな。」

お婆さんはサラに弓と矢筒と錆びた小さな剣を渡した。

「おっと、治すお金をあげてないね。ほら、これで治してきな。」

お婆さんは布袋からお金を取り出してサラに渡した。

「今から行って来な。と、言いたいところだけど。もうすぐ外も暗くなるだろうね。明日行ってくるといい。治したら次の頼み事だよ。」

外を見れば、いつの間にか暗くなり始めていた。

その後お婆さんは肉を切り分け。三人はそれを持ってそれぞれの家に帰った。

シェイの家では夕食に肉が増えた事で何時もよりも豪華な食事となった。

シェイは眠る前に、お婆さんからもらった剣に触れる。錆びてぼろぼろの剣は、簡単に折れてしまいそうに見えた。

「マテリアルハンターか。僕にやっていけるだろうか。」

現時点では、どうなるかは分からない。だけど、ただ辺りを走り回るよりは良いんじゃないだろうか。シェイはそう思う事で、自分を納得させる事にした。

シェイは剣から手を離すと、目を瞑って眠った。

第三話 次への準備

第三話 次への準備

次の朝、シエイが目覚めると剣を持って早速鍛冶屋へ向かった。彼にとってはこれまで一度もお世話になったことの無い場所である。シエイは鍛冶屋へ向かう途中で、空を見上げる。彼を照らす太陽はまだ低く暑さもそれほど感じなかった。

「すみません。誰か居ますか。」

シエイは鍛冶屋に着くと扉の前で挨拶をする。建物の煙突からは煙が出ているので居るだろうと思った。

「なんだい。」

しばらくすると扉を開けて店主が出てきた。店主は体中汗びっしょりで、先ほどまで仕事をしていたらしい。扉を開けた途端に中から熱い空気が流れ出てくる。

「この剣を治して欲しいんです。お願いできますか。」

シエイは店主にお婆さんから貰った剣を渡した。店主は受け取ると、剣を端から端まで見ていった。店主は一度頷くと剣から視線を離れた。

「分かった。治しておいてやる。昼過ぎにでも取りに来な。」

店主はシエイの剣を持ったまま扉を閉めようとした。そこで、

「そっぴいえば、あんたの前に二人ほど剣を治して欲しいって奴が来たよ。何か始める気かい。」

シエイは「何か」を始めることは確かなので頷いた。すると、店主は突然口を大きく開けて笑い出した。

「そりゃ楽しみだ。待ってるよ。蘇らせてやる。」

店主はシエイにそう言うと、扉をしめて建物の中に戻った。

これでシエイは昼過ぎまで特にする事も無くなった。彼は、鍛

冶屋を離れようとする背後から声が聞こえてきた。

「お前も剣を渡したのか。」

シエイが振り返るとそこにはレンが居た。彼は鍛冶屋の壁にもたれかかっている。

シエイは先ほど鍛冶屋の店主が話していた「二人」がレンとサラだと思った。しかし、サラは此処には居ない。

「レンは既に渡したんだ。サラは何処かわかる。」

すると、レンはシエイに背を向けて歩き出した。

「こっちだ。」

シエイはレンの後について歩くと、サラを見つけることが出来た。

彼女はお婆さんから貰ったもう一つの武器を使って練習をしていた。彼女は的を狙い弓をしぼる。的と言っても、布を張った単純なものだ。

弓を引く手を自由にすると同時に、矢は的へ向かって勢い良く飛んでいった。そして、的に当たる。的に当たった時の音はせず、ただ布に突き刺さっただけだ。

「サラだけ、他の事が出来ていいな。」

シエイはサラに近づく。サラは弓を下ろしてシエイを見た。

「剣を治している間にこっちの方の腕も上げとかないとね。足ひっぱっちゃ悪いでしょ。」

サラはそう言いながら、的に向かって歩き出す。シエイも釣られて歩いた。

サラは先ほど放った矢を取って見る。

「練習しないと恐いの。今まで扱ったことなんて無いんだもの。」

サラは何かにおびえた顔をしていた。シエイはサラの肩を軽く叩く。すると、サラはシエイを見た。

「大丈夫。僕だってレンだって同じだよ。」

シエイはレンを見る。レンはその場に座って暇そうにシエイたちを見ている。

シエイはサラに視線を戻した。

「だけど、最後は実践で慣れていくしかないのかもね。大丈夫だよ。僕らが付いているから。」

サラはシエイの言葉にゆっくりと頷いた。シエイもサラに頷く。「それじゃあ。邪魔したら悪いから僕はレンのところに行くよ。」

シエイはレンのところへ歩いていく。そして、シエイはレンの隣に座った。サラは矢を持って、先ほど矢を放った場所まで戻る。

「どうよ。サラは。」

レンがサラを見ながら言った。

「何が。」

シエイはレンを見る。彼はレンの質問の意味が良くわかっていない。

「何がって。サラの調子だよ。矢を撃ってるだろ。聞かなかったのか。」

そこでシエイはやつと分かった。何度か頷く。

「これまで矢を撃ったこと無いから怖いんだって。僕らが頑張るしかないね。」

「俺達も剣を扱ったことが無いけどな。」

レンはシエイを見て笑う。釣られてシエイも笑ってしまった。

「そりゃそうだ。」

ひとしきり笑うと、シエイはある事を思い出した。

「そういえば、鍛冶屋に何時剣が治るって言われた。」

シエイはレンを見て言った。

「昼過ぎって言われたな。」

「僕も同じこと言われたよ。」

シエイはレンの言葉にすぐ返答した。二人も昼過ぎでは、後になつた僕のほうが遅れるのではとシエイは思った。

「昼飯食ってから渡したいんじゃないかな。サラは……。」

レンはサラを見る。今も的に向かつて弓を引いていた。

「弓があるから一緒に取りに行けばいいな。」

サラの引く弓から矢が放たれ、的に当たった。

昏過ぎに再び三人は集まると、鍛冶屋の扉を叩いた。

「すみません。誰か居ますか。」

しばらくすると、扉が開いて店主が現れる。

「ああ、三人揃って来るとはね。ちよつと待つてな。」

店主は扉を閉めて建物の奥に消えた。しばらくすると戻ってくる。

「はいよ、出来てるよ。」

店主の手には二本の剣があつた。どう見ても昨日渡された錆びた剣とは思えない。持ち主であるレンとサラはそれぞれ受け取り、お金を払っている。

「あの、僕の剣は。」

二人からお金を受け取って扉の向こうに消えようとする店主を引き止めた。

「あなたのは良い剣だ。だから、もう少しここで待つてな。」

店主はそれだけ言うと扉の奥に消えた。

レンとサラを見れば、うれしそうに治った剣を思い思いに振っている。シェイは扉の傍に座ってレンとサラの動きを見ていた。

「シェイの剣はまだなの。」

しばらく剣を振っていたサラが剣を収めてシェイの隣に座る。

「良くわからないけど、僕のは良い剣なんだつて。」

シェイは先ほど店主から言われたことをサラに言った。

「良い剣ね。何かが良いんでしょうね。」

サラは今も一人で剣を振っているレンを見た。

「何が良いのか、僕にはわかんないや。」

シェイは座ったまま背伸びをした。

その時、扉の開く音が聞こえる。扉を見れば店主が顔を出していた。その手には、長い剣がある。

「出来たよ。はいよ。」

店主は立ち上がったシエイに剣を渡した。

「おおつ。」

シエイはその剣をまじまじと見た。他の二人よりも長く待ったためか、凄く良い剣に見える。具体的にどのあたりが良いのかはシエイ自身には分からない。

シエイは店主にお金を渡す。

「大事に使えよ。」

店主はそれだけ言うつと建物の中へ戻っていった。

シエイは再度自分の剣を見た。昨日とは全く違う姿に、ただ驚くばかりである。

「さつそく振つてみれば。」

背後から聞こえるサラの声に、シエイは剣を構えた。

「えいつ。」

勢い良く剣を振り下ろすも、支えきれず地面に刺してしまう。

「重いなこれ。」

シエイは地面に刺さった剣を引き抜きながら言った。刃の部分が長いために、重さが増しているようだ。

シエイはもう一度、今度は地面に触れないように剣を振り下ろす。地面手前で剣を止める事は意外と辛い。それでも、今後お世話になるこの剣を扱うために何度も剣を振った。

「大丈夫か。シエイ。」

レンの声に、ふと我に帰るといつの間にか夕方になっていた。

三人ともその場で振り続けていたらしい。

「ああ、大丈夫だ。夢中で振ってたみたいだ。」

シエイは太陽を見る。赤く光る太陽は、地平線に向かってどんどん沈んでいた。

「剣も治ったことだし、そろそろお婆ちゃんのところへ行こうよ。」

サラはシエイとレンを見て言った。シエイは二人と共にお婆さんの家に向かった。

シエイたちは、お婆さんの家に集まっていた。お婆さんが三人の剣をそれぞれ見ていく。

「ふむ、あいつも良い仕事をしたね。」

お婆さんはそれだけ言うと、剣をそれぞれの持ち主に返した。「さてと、武器も治った事だ。次の頼み事を聞いてもらおうかね。いいかい。」

お婆さんの言葉に、三人は頷く。

「そうだね。せっかく剣が手に入ったんだ。森に行つて大蜂の針の部分を探つてきな。」

お婆さんの言葉に、三人が反応する。

「大蜂つて。蜂なの。」

レンは素直にお婆さんに聞いている。シエイは蜂を見たことがある。だけど、大蜂というものは見たことが無い。

「名前の通り、大きい蜂だよ。尻尾に毒針があるやつさ。そいつの針を採つて来て欲しいんだよ。」

毒針と聞いて、レンやサラはあまり良い顔をしていない。

「大丈夫さ、あいつらは動きが鈍い。刺す前に体を横に真っ二つにすればおしまいだよ。刺されなければ危なくないさ。」

お婆さんが言うには、出来れば大丈夫という事らしい。何処までも出来ればの話である。

シエイはふと自分の剣を見る。このままでは、剣があつても無くても変わらないのではないかと思つた。

「わかりました。やります。」

シエイはお婆さんに言った。少しの間を置いて、レンやサラもそれに続いた。

「そうかい。じゃあ決まりだね。今日はもう無理だから。明日行つてくるといい。」

そこで、お婆さんは何かを思い出したらしく言葉を続けた。

「そうだ。大蜂の針の部分に小さな袋も付いているから、それも忘れずに採って来るんだよ。破裂していたら針だけでいいからね。」

お婆さんの話では、その小さな袋に毒が入っているらしく針よりも重要らしい。

「気をつけて行って来るんだよ。」

その後、お婆さんと少し話をすると、三人は家を出た。

「シェイ。大丈夫なのかよ。」

お婆さんの家を出ると、レンが心配そうに聞いてきた。

「大丈夫かは分からないよ。だけど、剣を使わないなら持っている意味が無いよ。それに、昨日今日に剣を持ったんだから、それほど強い奴じゃないと思うけどね。」

レンはシェイの言葉に何度か頷いている。

「そうだな。やるしかないか。」

レンも覚悟を決めたようだ。

「二人とも。今日は暗くなるまで練習しようよ。」

サラの声で、三人は練習を始めた。練習といえど、剣を振るぐらいである。

その日は、外の空気が冷えるまで剣を振り続けた。

第四話 依頼と自らと

第四話 依頼と自らと

シェイ、レン、サラの三人は村を出て森へと向かっていた。空を見れば太陽は低く、肌に触れる空気は温まっていない。逆に寒いくらいである。

「なんでこんな時間から行くんだよ。」

レンは隣を歩くシェイに力なく言った。サラは二人の少し後ろを歩いている。三人ともそれぞれの武器を持っている。

「しょうがないだろ。サラが叩き起こしたんだから。僕だって……。」

その時、眠そうなシェイとレンの間にサラが入り込んだ。サラは二人を交互に見る。

「あんたたち二人は二度目でも、私は初めてなの。その点少しは考えてよ。」

「まさか、緊張して朝早く起きたのか。」

レンは語尾を上げてサラをからかう。サラはレンをじっと見ると、視線を前に戻した。

「仕方ないじゃないの。」

サラは小さく呟いた。

三人は森に入り、大蜂を探して森の中を歩いた。

「さてと、どこに居るのかな。」

レンは危機感の無い声を出して辺りを見ている。今日の彼は昨日の毒針への反応とは違う。あえてふざけた口調をすることで、ここにいるのかもしれない。

シェイとサラもレンを見失わない程度に離れて歩いた。あまり、べったりとくっついていっているのもよろしくない。

しばらく歩いて、蜂らしい生物は発見出来なかった。

「見つからないな。何処に居るんだろ。」

シエイがため息交じりに言う。その背後から、何か嫌な音が聞こえてきた。

「え。」

シエイはゆっくりと後ろを振り返る。そこには名の通り大きな蜂が飛んでいて、尻尾の辺りをシエイから見て奥に引き上げていた。尻尾を下げると同時に針を突き刺そうというのだろう。

「うおっ。居たぞ。」

シエイはすぐに大蜂から離れるとともに、残り二人に報告する。

それとほぼ同時に、大蜂は尻尾を勢い良く下げて針を刺そうとした。シエイは十分離れていたために針には触れなかった。

「大丈夫か。」

シエイの声に集まるレンとサラ。しかし、三人を囲むように数匹の大蜂が近づいてきた。

「さてと、頂きますか。」

シエイは剣を抜き、目の前の大蜂に対して水平に剣を振った。大蜂の体は簡単に真っ二つになり、地面に落ちる。

シエイはすぐに、他の大蜂に狙いを変える。視界の隅で、レンとサラがそれぞれ自分の剣で切り始めていることが確認出来た。

二匹の大蜂が、シエイの前に現れる。交互に二匹を見ながら斬るタイミングを待つ。

「きゃあ。」

その時、サラの悲鳴が聞こえ、倒れる音がした。シエイはすぐに目の前の二匹を真っ二つにすると倒れたサラの傍へ寄った。

「どうした。」

すぐにシエイの近くから嫌な音が聞こえ始める。

「邪魔なんだよ。」

シエイは振り向きざまに、剣を振る。大蜂の体を二つにすると嫌な音は消えた。

「大丈夫か。」

シエイはすぐにサラを抱え起こす。

「うん。大丈夫みたい。」

サラはゆっくりと立ち上がると大蜂に向かっていった。

シエイも近くに居た大蜂を斬っていく。

「これで終わりか。」

しばらくすると三人の周りには動かなくなった大蜂が散乱していた。

「サラ、大丈夫なのか。」

レンが心配そうにサラへ聞く。

「大丈夫よ。さつさと針を集めてお婆ちゃんの所へ持って行きましよう。」

サラは早速持ってきた袋に針を入れていく。ほとんどが剣で半分に分切っただけなので、大蜂の下半身がそのまま残っている。その見た目はあまり良いものではない。その状態から針と毒の入った袋を上手に取って自前の袋に入れていく。

「あちゃ。」

レンを見れば、毒の入った袋を破ってしまっていた。

「針だけでも良いって言ってたから大丈夫よ。」

サラがレンに優しく言う。

一匹ずつ針と毒の袋を取り除いていくと、後には大蜂の上半身だけが地面に転がっていた。

「これで全部かな。」

シエイは立ち上がると、背伸びをする。針を採るためにしゃがんで作業をしていたために体を伸ばしなくなっていた。

「さあ、帰りましょ。」

三人は針を入れた袋を持って森を出る。そして、村へと戻った。

「婆さん。持って来たぜ。」

レンはお婆さんの家に入る。シエイとサラも順に入った。

三人はお婆さんの前に袋を並べる。

「ありがとうね。こんなに早く採ってくるとは、やはりあんだ達に

は素質が有りそうだね。はい、これが今回のお礼だよ。」

お婆さんは三人にそれぞれ今回の報酬を渡した。そして、お婆さんは三人の持つて来た袋の中身を順に調べ始めた。

「あつたあつた。」

お婆さんは袋から毒の袋が付いた針を取り出す。また、傍に置いておいた水筒に使えそうな小さな竹筒を取った。毒の袋を割って、中の液体を竹筒の中に流し込んでいく。

「お婆ちゃん。何してるの。」

お婆さんはサラの声に一度手を止める。

「毒を集めているのさ。これを使えば、大きな動物だって倒せるよ。」

お婆さんは竹筒に蓋をすると、持ち上げて眺めた。そして、サラに手渡す。

「サラにあげるよ。無いよりは良いだろう。ただし、食用の動物には使っちゃいけないよ。その毒が人間の体に入っちゃうからね。」

サラは受け取った竹筒を一度見ると、自分の横に置いた。

「婆さん。次の頼み事は何だい。」

レンが聞く。お婆さんは何も反応せず、黙って何かを考えているように見えた。

「私からのお礼が無くて良いならあるよ。」

お婆さんは三人を見た。

「森へ行つて、猪一頭を狩つて村まで持つてくるんだ。猪は自分達で食べるのもいいし、誰かが買ってってくれるかもしれないよ。買って貰えれば、そのお金はそのままお前達のものだよ。」

シエイは猪という単語に反応する。薬草を採りに行った時、執拗に追いかけられたからだ。

「猪か。一頭ならなんとかなるだろう。」

レンがシエイを見る。シエイはレンに頷いた。今回は三人で武器もある。前回とは違う。

「大丈夫よ。三人で一頭なんだから。早速行つて来ましょうよ。」

サラは立ち上がり、レンとシェイを見る。

サラからは恐怖というものが全く見られない。

「サラ、落ち着きなさい。」

お婆さんの声がサラの動きを止める。

「お前達まだ何も食べて無いだろ。ちょっと待ってな。」

お婆さんは台所へ向かい、すぐに戻ってきた。手には大きめの魚がのった皿を持っている。

「これを食べてきな。」

三人の前に出されたその魚は、既に焼かれており一部が食べられていた。

「魚を貰ったんだけどね。こんな大きな魚は私一人じゃ食べきれないよ。良かったら三人で食べなよ。」

目の前に出された魚から漂う焼けた良い匂い。匂いはすぐに広がり、嗅覚を刺激する。

三人は素直に魚を頂いた。

お婆さんから貰った焼き魚でお腹を膨らませると、お婆さんの家を出た。

お婆さんの話では、出来るだけ村近くまで猪をおびき寄せてから殺す方が良いと言われた。三人で運ぶには重いという理由からしい。三人は運搬用の紐を調達すると村を出た。

「どうする。三人居るんだ。それぞれ役割を決めたほうがいいだろ。」

森へ向かう途中、レンは横を歩く二人を見た。

「そうだな。三人揃って森の中で猪を殺すよりは、誰かが外までおびき寄せたほうが良い。だとすると……。」

その時、サラがレンとシェイの前に出る。

「私が猪をおびき寄せるわ。二人は森の外で待っててよ。」

二人はサラの自信たっぷりな言動に言い返す言葉も無く。サラ

が猪をおびき寄せることになった。

三人が森の前に到着すると、サラはレンとシェイを見た。

「じゃあ、行って来るからね。」

シェイは心配そうにサラを見た。

「大丈夫よ。心配しないで。大きいの連れてくるからね。」

サラはシェイの気持ちを掻き消すかのように言った。サラは体を反転させると森の中へ入っていた。

「行ったな。」

レンの言葉にシェイは頷く。二人は、少しずつ森から距離を取る。

「それにしても、恐れを知らないって怖いな。」

レンは呟く。シェイは無事に戻ってくる事を願った。

サラは森の中を歩いていた。彼女の周りには鳥の鳴き声ばかりが聞こえる。それでも、サラの手は剣に触れている。何時何が出てくるか分からないからだ。

サラは同じような光景をしばらく歩くと、前方に猪を発見した。草木に見え隠れする猪の姿は大きい。

「居たわね。」

サラはわざと猪に見える所に立ち、弓を引く。先制攻撃をする事で、優位に立つとした。

狙いを定めた時、耳元に煩わしい音が聞こえてくる。その場を跳び跳ねて離れると、大蜂が一匹居た。

「なんでこんな時に出てくるのよ。」

サラは剣を抜き、大蜂を真つ二つに斬る。

すぐに猪が居た方向を見ると、音に気が付いてゆっくりとこちらに近づいていた。剣に付いた液体を拭くと剣に収める。すぐに弓を持つと、猪に狙いを定める。そして、矢を放った。

悲鳴と共に、猪に当たった事が確認できた。

何歩か下がりがりながら、猪が追いかけて来るか確認する。直後、猪は勢い良く飛び出してきた。サラも弾かれたように走り始める。

猪は意外に早く、サラは後ろを見る余裕も無い。

少しずつ明るくなる森の中。もうすぐ森の外。レンとシェイが居る森の外である。

「来たよ。」

サラは力いっぱい叫んだ。二人に届くように。

レンとシェイはただ森を見ながら立っていた。しかし、手は剣に触れている。猪が何時くるから分らないからだ。

「遅いな。大丈夫だろうか。」

シェイは心配になった。そして、あれこれと最悪の事態を考えた。

その時、サラの叫ぶ声がある。

「来たつてよ。」

レンが剣を抜く。シェイも考えていた事を何処かに追いやった。サラは森から飛び出し、こちらに向かって走ってきた。その後ろからは猪が追いかける。猪の体には一本の矢が刺さっている。サラが猪に向けて矢を放ったのだらうとシェイは思った。

「レン。もっと下がれ。」

シェイはレンをもっと下がらせる。シェイは出来るだけ村に近づいたほうが良いと考えた。

シェイは剣を抜く。猪とサラはシェイに向かってきている。

「サラ。どけ。」

シェイの言葉にサラはシェイに到達する寸前で道をそれた。サラの背後から来た猪は対応出来ずにそのままシェイの方へ向かって来る。

シェイは、猪に向けて水平に長い剣を振った。

「おらっ。」

空に響くほどの声とともに、剣は猪の顔面に激突する。シエイはその衝撃に耐えて剣を振り切った。猪の悲鳴が聞こえたが、シエイは聞き流した。

勢いを失った猪に向かってレン斬り付ける。サラもすぐに猪に向かつて斬り付けた。それでもなお猪は向かってきた。シエイは向かってくる猪の頭に剣を振り下ろした。

猪は少しふらふらと歩くと地面に倒れこんで動かなくなった。

「殺したのか。」

シエイが猪の目を覗きこむ。

三人とも猪の血で体は汚れていた。体に付いた生暖かい血はすぐに冷めて乾き始める。

「持ち帰ろう。レン、紐をくれ。」

シエイはレンから紐を一本貰うと、猪の前足を縛った。レンは後ろ足を縛っている。

「さてと、縛ったな。村まで持ち帰ろう。」

レンとシエイは猪を持ち上げて、村まで担いで運んだ。

「頑張つて。」

サラの軽い応援が背後から聞こえて来る。シエイは何か言おうと思ったが、サラのおかげなので何も言わない事にした。

三人が猪を持って村に入ると、村人の何人かが彼らを見る。

「おろすぞ。」

レンの声で、村の中心に猪は置かれた。すぐに小さな子供たちが猪の周りに集まる。

「さてと、これどうする。」

シエイは猪を見た。二、三日前はただ逃げるだけだったが、今では自ら狩りに行くほどになった。少しは、変わったのかも知れない。

「すごいなこりゃ。」

シエイが声のする方向を見ると、大男がしゃがんで猪を見ている。あの日、シエイとレンの二人と入れ替わりに猪へ向かって行っ

た男。肉を分けてくれた男だ。

「三人で狩ってきたのかい。」

男の言葉に三人は頷く。男は何度か頷き、立ち上がると三人を見た。

「なぜ猪を狩って来たんだい。誰かに頼まれたとか。」

その時、お婆さんが家から出てきた。

「お婆ちゃん。」

サラは大男の質問を他の二人に丸投げしてお婆さんの所へ行つた。大男、レンとシェイもお婆さんを見た。

「あの婆さんに狩ってきたらどうかって言われたんだ。だから狩ってきた。」

レンはお婆さんを見ながら大男に言う。そして、猪を見た。

「この猪。自分達で食べても良いけど、良かったら買ってくれないかな。」

大男はお婆さん、サラ、レン、シェイと彼らが狩った猪を順に見るとしばらく黙った。

そして、大男は大きく頷いた。

「俺が買ってやる。幾らだ。」

大男はお金が入った袋を取り出し、袋の中に手を入れた。

「買う本人が値段を付けてください。買い手が存在しないんですから。」

お婆さんはいつの間にか大男の傍に来ていた。サラはお婆さんの隣に居る。

「値段は自由か。」

大男は袋の中からお金をひと掴み取り出す。

その手を三人の前に出した。

サラが手を出して、お金を受け取る。

「おおつ。」

渡されたお金の量に三人は驚いた。三人が驚く間に、大男は仲間らしき人を何人か呼んで猪を持っていった。

「お金は三人で均等に分けるんだよ。じゃあ、今日はゆつくり休みな。」

お婆さんはそれだけ言うと、自分の家に戻っていった。

三人はお金を数え、均等に分けた。分け切れなかったお金で小さな争いが勃発したが、残りのお金は今回頑張ったサラにあげる事で決着はついた。

「まだ明るいね。」

サラの言葉で三人は空を見る。

見上げた空は明るくて、まだ何か出来そうな気がした。

第五話 新たな依頼主

第五話 新たな依頼主

猪を狩ってから三日。その間、シエイたちはお婆さんからの頼み事も無く普段の生活に戻っていた。彼らは頼まれなければ何もする事は無い。

彼らは森の中を歩き回ったり、海へ行つて後先を考えずに飛び込んでみたりした。

「暇だな。」

レンは海を見つめたまま呟いた。

海に見える海岸に座るシエイたちは、何かが抜けおちたようだ。

「そろそろ、戻るか。」

レンは一人立ち上がり村へと歩き出した。二人はその姿を見るも、すぐにまた海を見た。

そこには波と風の音がきこえるばかり。

「お婆ちゃん。もう頼み事が無いのかな。」

サラの声に、シエイはサラを見る。サラはシエイを見る事無くじつと海を見ていた。

「これからは自分たちで誰かから依頼を受けたほうが良いんじゃないかな。」

シエイは視線を海に戻すと、サラへ言った。

「自分たちでつて。そう簡単に頼んでくれる人が居るの。」

サラがシエイを見て言う。

「どうだろう。居ないかもな。」

シエイは砂の上に仰向けに寝転がり、空を見た。空には鳥が何羽か飛んでいる。

「僕は本当にマテリアルハンターなのかな。」
隣に居るサラも寝転がった。

「私たちがマテリアルハンターなのは確かよ。それが本物かどうかは別としてね。」

「本物か。」

二人はそれからしばらく波の音を聴きながら空を見た。

二人が村に戻ると、お婆さんの家の前にお婆さんと何人かの村人が居た。お婆さんがこちらに気が付くと、お婆さんと一緒に居た人達はどこかへ行ってしまった。

「お婆ちゃん。どうしたの。」

サラがお婆ちゃんに近づく。

「お前たちの次の頼み事が決まったよ。サラ、レンを呼んで来てくれないかい。」

お婆さんは実に嬉しそうに見える。サラは頷くとシエイを見た。「ちよつと行ってくるね。お婆ちゃんと一緒に居て。」

サラはそれだけ言うと、走ってレンの住んでいる家に向かって走っていった。

「外に突っ立っているのもなんだろう。家に入りな。」

お婆さんは自分の家に入っていった。シエイもお婆さんの後を追ってお婆さん家に入る。

しばらくするとレンを連れてサラが家の中に入ってきた。

「次の頼み事が決まったって。次はどんなのだい。」

レンは腰をおろすとお婆さんに尋ねた。サラもお婆さんの傍に座る。

「新しい頼み事はね。森の奥の方に居る白大鷲の卵を採ってくるんだ。採ってきたら、そのまま卵をテマのそこへ持って行くと報酬が貰えるよ。」

お婆さんの言う白大鷲とは森に棲む真っ白い大きな鷲のことだ。また、テマとは村で薬草やその他変わった薬を扱うお店の店長である。

「あれ、卵が欲しいのはお婆さんじゃなくてテマなの。」

レンがお婆さんを見て尋ねる。シエイとサラもお婆さんを見た。

「そうさ、この間お前達が猪を狩ってきただろう。それを見たテマがお前たちに頼みたいと私の所に来たのさ。何時までも私の頼みだけを聞いてちゃ良く無いよ。」

お婆さんの表情は嬉しそうにも寂しそうにも見えた。

「よし、まだ昼前だから。今から行ってこようぜ。」

立ち上がった他の二人に言ったのはレンだった。シエイとサラはレンを見上げる。レンの表情から何か足りなかったものが見つかったように見えた。

「そうだね。行こうよ。」

シエイはレンに頷くと立ち上がった。

「二人だけじゃ心配なもの。」

サラも立ち上がる。お婆さんはシエイたちの顔を順に見ていた。

「じゃあ、気を付けて行ってきな。」

シエイたちは力強く頷いた。

シエイたちはそれから軽い食事をとると森へと向かった。

シエイたちが森の中に入ると急に肌寒くなった。森の外では太陽が容赦なくシエイたちを照らしていたためかもしれない。

お婆さんの「森の奥の方」という発言から森の入り口近くでは無い事は分かった。

シエイたちは森の奥へ進んでいく。お婆さんの話では、白大鷲は木の上に巣を作って卵を育てているらしい。木に登る必要があるようだ。

さらに奥へ進む間に大蜂や猪を見るが、こちらに向かってきた場合だけ対処した。

「見つからないな。どこに居るんだ。」

シエイたちは木々に隠された空を見渡す。しかし、それらしい巣が見つからない。

「居ないね。」

サラも辺りの木々を見ているが見つけてはいないらしい。

その時、シェイの視界の端に白い大きな物体が見えた。

「あれ、まさか。」

その物体に近づくとつれて、真っ白い羽を持つ白大鷲とその巣を発見した。すぐに、他の二人にも知らせる。シェイたちはその巣の下に近づいた。

「これか。しかし、巣には一羽がくっ付いているぞ。どうするよ。」

レンがシェイに意見を求めてくる。

「一羽を追い払った隙に誰かが巣の中の卵を採ってくるのがいいかもな。」

シェイはレンに意見を述べた。レンはシェイの発言に頷いた。

「そうだな。三人居るんだからそれぞれ地面、木の中腹に待機と実際に鳥を追っ払って卵を採る役割に分けたほうがいいな。じゃあ、俺は中腹で。」

役割分担を提案したレンがそのまま自分の役割を決めてしまった。レンはシェイを見て続けた。

「まさか、サラに木の上に登らせはしないよな。」

レンの言葉にシェイはため息をつく。

「分かったよ。僕が卵を採ってレンに渡す。レンはサラに渡してよ。」

「わかったわ。」

サラもこの作戦に納得したようだ。

シェイは木の上に見える巣を見た。

「じゃあ、行くよ。」

シェイは巣がある木へ静かに登り始める。レンはその後を追って登り始めた。

シェイの体はゆっくりと地面から遠ざかり、少しずつ巣へと近づいていく。

すると、突然白大鷲が鳴きだした。シェイたちに気が付いたよ

うだ。

「なんでだよ。」

シエイは一気に登り、巢に居る一羽の邪魔をする。剣でひと突きも考えたが、この状態では剣も出せない。

「ほら、早くどいてくれ。」

頑なに拒む白大鷲を巢から離すとすぐに卵を一つレンに渡した。卵自体はそれほど大きくは無いが重量がある。

「ほら、早くしろ。」

シエイは一つ渡すと、すぐにもう一度巢を見て卵を採った。巢には四個の卵があったので、その内の二つを頂くことにした。

「痛い、痛いっての。」

シエイがレンに二つめを渡そうとしたとき後ろから白大鷲のくちばしで攻撃された。危うく二つめを地面に落としそうになったが、レンが受け取ってくれた。

シエイはすぐに木を下り始めた。少し木を下りると木の途中から一気に地面へ向かって飛び降りた。

「逃げるぞ。」

レンは先ほどシエイが渡した卵を持ったまま走り出した。サラも卵が入った袋を両手に持って走り出す。

シエイが木を見ると、白大鷲がこちらに向かって急降下してきた。

「本当かよ。」

白大鷲をかわすと、レンやサラに追いつこうと必死に走った。

その背後を白大鷲が追ってくる。シエイが二人に追いつくと、白大鷲はシエイたちを追い始めた。

「ごめんなさい。」

サラは走りながら叫んだ。追いかける白大鷲の気持ちも分かるのだらう。

「きりが無いぞ。なんか方法は無いのか。」

シエイは他の二人に言った。

「早く森の外に出ましよう。外までは追いかけてこないと思うわ。」
「猪はそれで失敗したんだよ。外まで追いかけてくるかもしれないぞ。」

サラの言葉にレンは過去の失敗を上げた。

「他にどんな方法があるのよ。」

サラの声にレンはシエイを見る。サラはレンの言いたい事を理解した。

「斬らないでよね。」

サラはシエイに叫んだ。シエイはサラの迫力に頷く事しか出来なかった。

目の前に光が見えてくる。もうすぐ森の外だ。

シエイたちは冷たい森の中から太陽に照らされた外に出た。

「追いかけてきたか。」

レンは体を反転させて森の入り口を見た。他の二人も同様に森の入り口を見る。

しかし、待っても白大鷲は森を抜けて出てこなかった。

シエイたちは何度も振り返りながら村へと入った。

そのまま、テマの居る店へと向かう。

「おお、ごくろうさん。」

店先にはテマと共にお婆さんが居た。二人とも椅子に座っている。シエイたちを待っていたようだ。

サラとレンは採ってきた卵をテマに渡した。

「うまくいったみたいだね。」

お婆さんはシエイたちを見て言った。

シエイたちは走り疲れて居たがなんとか笑顔で頷いた。

「ほら、これが報酬だよ。よかつたら、またお願いしたいね。」

シエイたちはそれぞれテマから報酬であるお金を受け取った。

「そうだね。その時は私に言っておくれ。じゃあ、私は帰るよ。」

お婆さんはテマにそう言つと、シエイたちを見た。

「三人とも今日はお疲れ様。帰って休みむといいよ。また何かあつ

たら呼ぶからね。」

お婆さんはシェイたちにそれだけ言うと自分の家へ向かって歩き出した。

テマはお婆さんが家へ向かうことを確認すると、シェイたちを見た。

「お疲れさん。お婆ちゃんは三人が心配だったんだよ。うまく行くかどうかね。」

シェイたちはテマの言葉からお婆さんが心配していた事を知った。

三人はテマにお礼を言うとその場を離れてそれぞれの家へと戻った。

次の日から、村に居る他の人たちがお婆さんを介してシェイたちに頼み事を言いだした。森の中に生えている何とかと言うきのこを採ってこいとか、猪を三頭同時に狩ってきて欲しいなどである。シェイたちはその都度森や海に行つて依頼された素材を採ってきた。

だって、彼らはマテリアルハンターなのだから。

第六話 最後の依頼

第六話 最後の依頼

まだ太陽が昇らない早朝。シエイたちは小さな船に乗って沖に出ていた。太陽が出て居ないためか昼間と違って肌寒い。三人はそれぞれ何時もよりも少し多めに服を着ている。それでも何も覆っていない顔に風があたると小さく震えた。

「なんで僕たちこんな事してるんだっけ。」

シエイは体に当たる風を我慢しながら他の二人に聞いた。

「魚を釣ってこいって仕事でしょ。」

サラの返答から、彼女のやる気が全く見えてこない。

三人はそれぞれ竿を持っており、海へ糸を垂らしている。しかし、先ほどから反応が全く無い。

「一応これも素材なんだな。料理の素材か。」

レンが何かを納得したように言った。その言葉に、サラが反応する。

「魚なんて自分で釣って来なさいよね。これじゃただの何でも屋でしょう。この間だって海塩作らされたのよ。」

サラの言葉から、触らぬ神に祟り無しと思ったシエイとレンは静かに魚がかかるのを待った。

しかし、三人ともなかなか釣れない。先ほどから全く反応が無いのである。餌をしつかり付けたはずである。

「なんか嫌な予感がするんだけど。」

サラはそう言いながら海から糸を引き上げている。

シエイとレンはサラの独り言として聞き流して海を見た。海は本当に静かで、もう少し暖かければ眠れそうだ。それに何時もはまだ眠っている時間である。

「あ、やっぱり。」

サラの声に、シェイとレンはサラを見る。サラの手にある釣針には餌が無い。

「餌だけ持って行くとはな。頭の良い魚だ。」

レンが冷静に反応している。

「落ち着いてないであんた達の針も見なさいよ。餌無しじゃ意味無いわ。」

レンの反応がサラにはしゃくに障ったようで、少し怒った口調でシェイとレンに言った。

サラの言葉にシェイとレンは自分たちの糸を海から引き上げる。今彼女に逆らうとどうなるか分からないからだ。

シェイが自分の釣針を見ると、案の定と言つべきか餌が全く付いていない。それは餌が付いていないためか、悲しいくらいに綺麗な針に見えた。

「なんてこった。」

レンの手元を見れば同じように餌が付いていなかった。

シェイとレンはそれぞれ新たな餌を付けて再び海へ投げ込む。

再び静かな時が訪れた。

それからしばらくしてサラが一番最初に魚を釣り上げた。その魚は以外と大きく、シェイが自分の竿を置いて手伝うほどである。

その後も三人は大漁目指して粘ってみたものの、結局成果はサラの釣った一匹だけだった。

三人は太陽が昇り始めると、サラの釣った一匹を持って村へと戻った。

三人が依頼主の家に近づくと、誰かが家から出てくる。さらに近づくとお婆さんだということがわかった。シェイたちがすっかり頼み事を行ってきたかの確認かもしれない。

「おはよう。そして、お疲れ様。」

お婆さんは三人に挨拶をするとそのまま依頼主の家の中に入って行った。

「お前達も早く入りな。」

お婆さんの声に三人は家に入る。

中に入って座ると、お婆さんは奥のほうに居る誰かを呼んでいる。しばらくして、奥から夫婦が現れた。男の方は具合が良く無いらしく、女に支えられてシエイとお婆さんの傍に着き、腰をおろした。

「大丈夫かい。」

お婆さんが心配そうに男を見ている。女はお婆さんを見て、男を見た。

「心配しなくても大丈夫ですよ。」

男はなんとか笑顔を作ってお婆さんやシエイたちを見る。

「魚は釣れたか。」

男の言葉にシエイたちは顔を見合わせる。

「あの、ごめんなさい。魚が一匹しか釣れなかったんです。」

サラは釣り上げた魚を男に渡した。男は受け取った魚をじつと見た。一度頷くとシエイたちを見た。

「ありがとうよ。こんな状態じゃなければ自分で釣りに行けるんだがな。」

男は体の具合が悪くなったために食料の調達が出来なくなり、お婆さんを通じてシエイたちに頼んできたらしい。

三人はお婆さんを介して頼まれたために、相手がどんな状況かを理解していなかった。シエイは、ふと自分たちで依頼主と面と向かって仕事を受けたいと思った。そうすれば、何故頼まれたかを理解出来る。今のままでいいのだろうか。

「これがお礼だ。受け取ってくれ。」

男は懐から取り出した袋を開いて、シエイたちそれぞれにお金を渡した。

「ありがとうございます。」

三人はお礼をありがたく頂いた。

シエイはお金を眺める一瞬の間に視界の端でお婆さんが動いた事がわかった。すぐにお婆さんを見る。

「それじゃあ。私は帰るよ。朝早くからありがとだね。」

お婆さんは夫婦にそう告げるとシエイたちを見た。

「三人とも、あとで私の所に来なさい。」

お婆さんはそのまま家を出て行ってしまった。

三人は夫婦にお礼を言うつと、それぞれの家に戻って休んだ。

シエイは家に入ると、多めに着ている服を脱いで床に寝転がった。朝から動いたせい、今日という日が長く感じられる。

シエイは寝転がりながら依頼主の家で考えた事を思いだした。やはり、お婆さんを介さずにこれからは三人だけで依頼を受けるべきなんじゃないだろうか。

そこで、お婆さんが言った言葉を思いだす。

「お婆さんの所に集まるなら、言ってみよう。」

そうは言ったものの、シエイはそのまま眠りについてしまった。

サラは昼まで家で休むと、おばあさんの家へと向かった。

「お婆ちゃん。来たよ。」

サラはお婆さんの家に入ると、お婆さんがサラを見た。

「良く来たね。レンも来てるよ。」

お婆さんの傍にはレンが既に座っている。レンがサラを見た。

「あとはシエイだけか。仕方ない。呼んでくるか。」

レンは立ち上がり靴を履こうとした。サラはその行為を止めようとする。

「いいわ。私が連れてくるから、レンはお婆ちゃんと一緒に居てよ。」

サラはレンにそう告げると、お婆さんの家を出てシエイの家へ向かった。

サラがシエイの家を覗くと、シエイは靴も脱がずに床に寝そべっていた。

サラはその光景を見てため息をつく。

「シエイは居ますか。」

既にサラの視界に入っているにも関わらず尋ねた。

すると、ゆっくりとシエイは体を起こす。目を擦り眠そうである。

「お邪魔します。」

サラはそのままシエイの家に入り込み、シエイの前に立つ。

「おはよう。」

サラは満面の笑みでシエイの顔を覗きこんだ。

「お、おはよう。」

シエイはサラの挨拶とは対照的に今にも消え入りそうな声で言った。シエイの視線はサラを見ているわけでは無く、地面をじっと見ているように見える。

シエイがゆっくりと視線を上げるとサラと目が合う。シエイはサラの顔がすぐ近くにある事に驚いた様子ですぐに視線を逸らした。「な、何。どうしたの。」

サラはシエイから顔を離すとシエイを見下ろした。

「ほら、お婆ちゃんの家に行くわよ。レンだってもう集まってるんだから。」

シエイは一度サラを見ると、ゆっくりと立ち上がり背伸びをした。

「じゃあ、行こうか。」

シエイとサラはシエイの家を出てお婆さんの家へ向かった。

「連れてきたよ。」

サラはシエイの背中を押ししてお婆さんの家に入った。そして、シエイとサラはそれぞれ座る。

お婆さんは三人をそれぞれ見た。

「三人揃ったね。今日は朝から大変だったね。お疲れ様。」

「あの。」

シエイの声にその場に居た全員がシエイを見る。

「今日の依頼主って何か具合が悪かったから僕らに頼んで来たんで

すよね。」

シエイはサラやレンを見る。サラやレンもシエイを見ていた。シエイはすぐにお婆さんを見た。

「それなのに、僕は釣りをしている間依頼主が自分で採って来ればいいじゃないかと思ったり言ったりしてました。これって、素材を採って来る僕らが依頼主と面と向かって依頼を受けて無いからこんな事になると思うんです。だから、今度から僕らだけで依頼を受けたほうが良いんじゃないかと思えます。」

シエイは言い終えると一度大きく深呼吸をした。

お婆さんはシエイの言葉に何度も頷く。

「そうだね。お前達には相手の状況なんて伝えて無かった。だけど、私だってお前達三人だけで他人から依頼を受けてやっていけるか心配だった。だからみんなから一杯依頼が来たけど、その中から私が良いと思ったものだけを受けたんだ。」

お婆さんは三人を順に見ながら続けた。

「それでも、そろそろお前達だけでやっていくべき時期に来たんだろうね。だから、もう私は必要ないだろう。これからは自分たちでやっていきな。」

お婆さんは寂しそうな顔で三人を見ている。三人はそれぞれに頷くものの声は出さなかった。沈黙が四人を包み込む。

「よし、最後にお前達に採って来て貰いたい物があるんだ。頼めるかい。」

お婆さんは何かを決意したように笑顔で三人を見る。

「今度は何を採ってくるの。お婆ちゃん。」

サラがお婆さんに尋ねる。サラの言葉にお婆さんは彼女を見て微笑んだ。

「ほらほら、依頼主に対してそんな接し方じゃ駄目だよ。今度からは親しい相手とは限らないんだからね。」

サラはかしこまってお婆さんを見た。

「お婆さん。今回は何を採ってくればいいんですか。」

サラの他人行儀な言動に、シェイとレンは驚いてサラを見る。

「うん、そんな風にするといいよ。それで、今回採って来て欲しいのは花だよ。森のずっと奥にある岩に生えている花。花びらは四枚で薄い赤色をしていているやつさ。昔知り合いが採って来てくれて、凄く綺麗だったのを覚えている。だけど、最近じゃ採りにいける人間が居なくてね。また見たいよ。」

お婆さんの視線は何処か遠くを見ている。シェイがお婆さんの顔の前で手を何度か振ると、お婆さんこちらの世界に戻ってきたようだった。

「おつと、ごめんよ。それじゃあ、その花を三本採って来ておくれ。報酬は……。」

「報酬は要りません。」

お婆さんの言葉を遮ってサラは言った。そして、サラはシェイとレンを見る。シェイとレンはサラの言いたい事を理解したようで、それぞれ頷いている。

「報酬は要らないです。お婆さんには色々お世話になったから。」

シェイは真っ直ぐにお婆さんを見る。お婆さんは納得したようで何度も嬉しそうに頷いた。

「ありがとうね。今日は朝まで仕事をしていただろうからゆっくり休んで、明日採ってきておくれ。待ってるからね。」

お婆さんの言葉に返事をしつつ、シェイたちはお婆さんの家を出てそれぞれの家へと戻った。

最終話 マテリアルハンターズ

最終話 マテリアルハンターズ

小鳥のさえずりの聞こえる朝。

シエイは太陽が昇り始めると、家の外へと出た。せいっぱい背伸びをする。空気は冷たく目を覚ますにはちょうど良い。そのまま家の壁に寄りかかり、太陽を見た。太陽の光はシエイを照らし、体を温めていく。シエイはしばらく家の前から太陽や村の中を見た。時間が経つにつれて人々は起き出す。シエイは家の中からの声に応え、朝食を食べるために家の中に戻った。

シエイは朝食を済ませると身支度を済ませ村の中心に向かう。中心に着くと荷物を置いて座り込んだ。

シエイたちは最近では村の中心に一度集まってから目的地に向かうようにしていた。

「よう。今日も仕事かい。」

シエイの背後から声が聞こえてくる。素早く振り向くと、大男立っていた。シエイたちを追いかけた猪を仕留めた男である。

「ええ、今日は森の奥のほうに。」

シエイは立ち上がり、大男を見る。

「森の奥ね。」

大男はその言葉をゆっくりと口にする。

「あまり奥に行くと、大きな虎の餌になるかもしれないから気を付けたほうがいいぞ。」

大男はそれだけ言うと、体を反転させて歩き出す。

「と、虎つて。」

シエイの言葉に大男は手を振るだけだった。シエイは再び地面に座り、レンとサラを待った。

しばらくすると、サラが現れた。

「おはよう。今日は早いね。」

サラはシェイの傍に座り込む。そして、自分の弓や矢を見始めた。

それからシェイとサラは何も喋らず、矢と矢がぶつかった時に発生する軽い音だけがその場に響いた。

シェイは仰向けになつて空を見た。

「悪い悪い。遅れちまった。」

レンが二人の元へ走つてきた。走つてきたためか少々息が荒い。その声にシェイは起き上がる。

「揃ったね。」

シェイは立ち上がと二人を見た。続いてサラも立ち上がる。

「よし、行こうぜ。」

レンは二人よりも先に動き出す。シェイとサラはその後に付いて行った。

三人は村を出て森までの道を歩く。特に何も無い道。朝が早いものの荷物を載せた馬車が三人の横を通り過ぎる。

シェイは馬車が通り過ぎた後に気が付いて振り返る。先ほどの馬車は、前にシェイがぶつかった馬車だった。

「どうしたの。」

サラは立ち止まったシェイを見た。シェイはすぐに体を反転させて森へと向かつて歩き出した。

「何でも無いよ。」

シェイは歩きながらサラへ言った。

そして、三人は森へと入った。見慣れた場所のさらに奥へと進んでいく。

突然、耳障りな音が聞こえてくる。

「まさか、あいつらか。」

三人は剣を抜き、辺りを見回す。すると五匹の大蜂が三人に近づいてくる。しかし、三人にはもう恐怖など無く。一匹ずつ真つ二つにすると、毒袋を回収した。

「使わないのにどんどんたまっていくな。使わないといつか溢れるぞ。」

レンは毒を搾り出すサラを見て言った。

「いつか使うでしょ。いつかね。」

サラは毒を絞り終えると竹筒に蓋をする。

「さてと、早く奥へ行こうか。」

三人は再び森の中を歩き出す。しばらく歩くと、何処からか鳥の鳴き声が聞こえてきた。

「何処で鳴いているんだ。」

シエイは辺りを見回す。すると、三人の背後にある木の上に一羽の鳥が居た。葉に隠れてどんな鳥かは分からないが、何か嫌な予感がした。その木を前に何処かで見た事があるからだ。

「まさか、まさかね。」

シエイは自然と後退する。レンやサラも何かを感じ取ったよう動かずにじっと見ている。

すると、突然木に止まっていた鳥がこちらに飛んできた。

「白大鷲じゃないか。」

シエイは森の奥へと走った。レンとサラもそれに続く。

走りながらシエイは剣に触れる。しかし、そこでサラの言葉を思い出した。剣を上げれば、サラが止めるだろう。しかし、この状態でどうすればいいのだろう。

「やるしかないだろ。」

レンは立ち止まり。剣を抜いて体を反転させた。白大鷲がレンに近づいてくる。

「レン。やめて。」

サラの声がその場に響く。

白大鷲を見れば、羽を大きく羽ばたかせて空中に留まっている。

「来るなら来い。」

レンは剣を構える。シエイは止むをえず剣に手をかけた。サラのみ何もせずその状況を見守った。

しかし、白大鷲はそのまま何もせず戻って行った。

「逃げて行きやがったな。まあ、いいか。」

レンは剣を収める。シェイは剣から手を離れた。サラは安堵の表情を見せた。

白大鷲は先ほどまで追いかけてきたのに、突然何もせず戻って行ったのは何故だろうか。シェイは考えたものの、答えはでなそうなので止めた。

三人は再び森の奥へと向かって歩き出した。すると、先ほどよりも少しずつ辺りが明るくなり始めた。頭上を見れば木々の間から太陽が見えた。

「なあ、あれじゃないか。婆さんが言っていたのは。」

レンの視線の先には、大きな岩が一つある。その岩の周りには芝が生えており、その周りを囲むように木が生えている。そのため、岩の頭上には空が見え、そこから直接太陽の光が降り注いでいる。

「これみたいだな。」

シェイが岩に近づくと、岩はシェイの身長よりも高い。シェイは岩に足をかけて登り始めた。レンも岩に登り始める。

「これじゃないか。」

岩に登ったシェイが岩に生えた薄い赤色をした花。お婆さんの言う通り花びらは四枚になっている。

「三本だったな。」

シェイとレンは見つけた花を取っていく。

「それにしても綺麗だな。もう一本。」

シェイはお婆さんの依頼の分とは別に自分の分として一本取った。

「取りすぎないでよね。私達が作っているわけじゃないんだから。」

サラを見れば袋を開けて、袋の口をこちら側に差し出している。

シェイとレンは取った花を全部入れた。

「さてと、帰るか。」

レンが岩から飛び降りる。シェイも飛び降りようとした時、何

処からか低い咆哮が聞こえてきた。

「な、なんだ。」

シエイは岩から飛び降り、剣に手をかける。レンとサラもそれぞれに自分の武器に手をかけた。そうしないと怖いからだ。

そして、木々の間からゆっくりと奴は現れた。その姿は白い虎であるものの、通常の虎よりも大きい。人間一人を簡単に飲み込んでしまいそうな口、木のような太さの足。

そして、白い虎は完全な姿を太陽の下にさらした。

シエイたちは動く事ができず、ただ白い虎を見るだけだった。

白い虎は三人を見て吼える。その咆哮は耳を塞ぎたくなるほどの大きさだ。

白い虎は飛び、三人の目の前に着地した。

「こんなの無理だろ。逃げるぞ。」

すぐにレンが走り出す。続いてサラも走り出そうとしたが、固まるシエイを見て、腕をひっぱって無理やり走らせようとする。

シエイの体が後ろに傾いた時、白い虎の右前足がシエイの目の前を通り過ぎる。風が顔にぶつかり一瞬目をつむる。

シエイは目を開けると目の前に居る白い虎と目が合った。白い虎は低く唸っている。

すると、シエイの思考が正常に近づく。簡単に死んでたまるか。シエイは心の中で叫んだ。

「逃げるぞ。」

シエイは体を反転させ、サラの手を握って走り出した。直後、背後に風を感じる。

三人は乱立する木々をかわしながら森の出入り口へと向かって走った。

白い虎の体は大きすぎるためか、木々をなぎ倒しながら近づいてくるため、二人との距離が長くなっていく。

「どうすりゃ逃げ切れるんだ。」

シエイは背後から来る白い虎を見た。白い虎は出来るだけ木の

少ない所を選んでこちらに向かっている。このままでは相手が諦める前にこちらの体力が無くなる。

「倒すしかないか。」

シエイは立ち止まるなり、体を反転させ剣を抜いた。

「仕方ないわね。」

サラも矢筒から矢を取る。腰にある竹筒の蓋を取り、その中に矢の先端を浸けた。その矢をつがえ弓を引く。先端から液体が地面に落ちる。

「お前ら死ぬ気かよ。」

先に逃げていたレンも加わり、三人は白い虎を向かえた。

白い虎が木々をなぎ倒しながら近づいてくる。シエイはサラの矢を見て、サラの腰に付けてある竹筒を取った。

「ちよつと、何するの。」

シエイはサラの言葉を流して、自分の剣に液体をかけた。そして、レンに渡す。レンも同様に自分の剣に液体をかけた。レンは竹筒の蓋を閉めシエイの前に投げる。白い虎はその間にも三人に向かってきていた。

白い虎は三人にある程度近づくとゆっくりと近づいてきた。三人と少し離れたところで歩みを止める。

三人が武器を構え、白い虎は吼える。

シエイとレンは大声を上げながら白い虎に近づき、サラは白い虎の顔面に矢を放った。

矢が当たり、隙が出きた白い虎目掛けてシエイとレンは斬りかかった。白い虎が余りに大きいため、二人は白い虎の真下に入り込む。二人は真下から斬りかかった。

白い虎は後退して、二人を前足で放り投げた。二人は地面に落ちて転がる。

追い討ちをかけようとする白い虎の体に矢が刺さる。白い虎は目標を変え、サラに近づく。シエイとレンはゆっくりと立ち上がり、背後から斬りかかる。

シエイは白い虎に剣を突き刺した。白い虎に激痛が走ったのか、振り落とそうと暴れだす。

「竹筒を投げる。早く。」

レンが斬り付ける間に、サラはすぐ傍にある竹筒をシエイに投げた。高く投げられた竹筒は、シエイの頭上を通り過ぎようとする。そこで、シエイは白い虎の体を蹴って、竹筒へ向かって飛んだ。空中で竹筒を取ると着地して自分の剣が刺さっている所へ向かう。

シエイが剣に手をかけると、さらに一本の矢が白い虎の体に刺さった。サラを見ると、さらにもう一本矢をつがえ弓を引いている。シエイは、自分の剣を無理やり振って刺さった傷口を広げると、そこへ竹筒の中の液体を全て流し込んだ。流し込み終わると、剣を抜き白い虎から離れた。

白い虎から離れて見ると、先ほどよりも動きが鈍くなっていた。「レン。離れる。」

レンはシエイの言葉に最後の一撃を与えると、こちらに向かって走ってきた。

「倒すんじゃないのか。また襲ってくるかもしれないぞ。」

レンはシエイと白い虎を見た。

「弱ってきてるよ。これ以上こちらに向かってくるなら倒すけど、逃げるなら逃がそう。」

シエイは白い虎を見ると、レンとサラを見た。

「それに、今回はこの白い虎を倒す事が目的じゃないんだから。」

三人は無言で白い虎が下す決断を待った。

すると、白い虎は三人を見て小さく唸ると、森の奥へゆっくりと帰っていった。

「いいのかよ。倒さなくて。」

レンはシエイを見る。レンにとっては倒して終わらせたかったよ
うだ。

「だから、倒したって何になる。虎の皮が欲しいのか。そうだと
して、取ったとして買ってくれるあてはあるのか。」

シエイは遠ざかる白い虎を見た。体中に傷を付け、歩みは遅い。「無駄な死はさせたくないんだ。」

シエイは体を反転させ、森の入り口へ向かって歩きだした。「帰ろう。用は済んだのだから。」

レンとサラもシエイのあとに続いて森の入り口へと向かった。森を抜けると、そのまますすぐ村へ向かう。三人とも疲れ果て、歩みは遅い。

空を見上げれば光を失い暗くなり始めていた。

三人が村へ入ると、お婆さんと数人の村人が待つて居た。

「遅かったね。大丈夫だったかい。」

シエイとレンはその場に座り込む。サラは花の入った袋をお婆さんに差し出した。

お婆さんは袋を開けて中に入っている花を確認した。

「確かにあの花だね。ご苦労さま。だけど私が頼んだのは三本だから一本は返すよ。」

サラはお婆さんから袋と花を受け取ると、残った花をシエイに差し出した。

「シエイが取ったんでしょ。はい、あなたの分よ。」

シエイはサラから花を受け取ると、まじまじと見た。そして、サラはシエイの隣に座り込んだ。

「みんな今日はお疲れ様。よくやったね。私から、あなたたちに採って来てもらう素材はもう無いよ。今後は、色々な人から頼まれた仕事をこなして報酬をもらうんだよ。」

お婆さんはそう言いながら隣に居る人たちを見た。

「彼らがお前達に頼みたい人達だよ。まあ、今日は疲れて居るだろうから、明日以降に話を聞いてあげなよ。」

お婆さんはそう言つと、一緒に居た人達を帰した。

「じゃあ、私も帰るよ。今日はゆっくり休んでまた明日から頑張るな。」

お婆さんはそれだけ言つと、自分の家へ帰っていった。

「さてと、俺は帰るよ。また明日な。」

レンは立ち上がると自分の家へと向かって歩き出した。

「さてと、私達も帰りましょうか。」

サラは立ち上がり、自分の荷物を持つとした。

「待って。」

シェイが立ち上がる。そして、先ほど渡された花をサラに差し出した。

「これ、サラにあげる。受け取ってよ。」

サラは戸惑いながらもシェイから花を受け取る。

「ありがとう。」

サラはじつと花を見た。シェイはその姿を確認すると荷物を持つて自分の家へ歩き出した。

「それじゃあ、また明日な。」

「あ、また明日ね。」

背後からサラの声が聞こえてくる。

シェイは振り返らずそのまま自分の家へと戻った。

次の朝。三人は揃って依頼主に会いに行った。お婆さんが一切関わらない依頼に三人は緊張する。

シェイたちが依頼主の家を訪ねると、依頼主が家から出てきた。

「おう、待ってたよ。入りな。」

三人は家の中に入り、依頼主と真向かいに座る。

シェイは左右に居るレンとサラを見ると、それぞれがシェイに頷いた。彼は一呼吸おくと依頼主を見た。

「何処で何を採ってくればいいんですか。」

そして、彼らは本当のマテリアルハンターになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4082f/>

マテリアルハンターズ

2011年10月5日00時28分発行